

## この三冊

池澤, 一郎  
九州大学

<https://doi.org/10.15017/4784004>

---

出版情報 : 雅俗. 19, pp.2-3, 2020-07-15. 雅俗の会  
バージョン :  
権利関係 :



## この三冊

池澤 一郎

日本漢詩文という分野には先行研究が少ない。一九八〇年代後半、日本近世文学会には日野龍夫、徳田武、揖斐高の三氏がおられて、陸続と論文著書を発表されていた。本稿で、『徂徠学派』（筑摩書房）、『江戸詩人傳』（ペリかん社）、『江戸詩歌論』（汲古書院）の「三冊」を挙げて、三氏への学恩を記して責めを塞ぐことは、旧稿の蒸し返しになるので避ける。

先行研究が少ないという観察は、実作と研究とを二分する故の不明察で、鈴木豹軒氏、今関天彭氏、吉川善之氏と、各詩体に亘って、量質ともに驚異的な漢詩文を遺した人が二十世紀後半まで跡を絶たず、個々の作品の典故や語彙、修辞には各人の積年の研究成果が凝縮していることを筆者が洞察出来なかつたに過ぎぬ。押韻平仄や独得の修辞法に習熟する必要がある漢詩文は、小説、和歌、連歌、俳諧にも増して実作と研究とが不可分の関係にある。そのことを痛感させる名著が、木下彪『国分青厓と明治大正昭和の漢詩界』（二〇一九、研文出版）である。これは近代漢詩の専著だが、近世後期からの日本漢詩の集大成が明治漢詩であったことを明示する。本書の美質は、国分青厓門下の著者が、師の宿敵であった森槐南の力量を高く評価する叙述に富む点である。本書の

自在な構成の中には、貴重な逸事が鏤められているが、就中、戦後間もなく、徳島の鳴門の旧家が蔵する伊藤聴秋の「鳴門観壽」七絶の草書の書軸を、著者が訓読解説すると、学藝員から多年に亘って誰も読めなかつたと感謝された場面（二十一回）と、著者が若き日の吉川幸次郎氏と次韻の唱和詩を応酬する條（四十八回、四十九回、五十回、五十八回、五十九回、六十回）とが印象深い。

吉川氏が、狩野君山氏や鈴木豹軒氏から作詩作文を鍛えられていた折、木下氏が寄せた漢詩に、吉川氏が応答しえぬことを恥じ入って「赧然」とされたことを、木下氏は「純情愛すべき人柄」と評す。その吉川氏が八十年近く前に草した文章、書評「長澤規矩也氏『支那文学史研究法私説』」（一九三九・八「東方学報京都」、一九六八『全集』第一巻）をここに紹介する。

長澤氏は当該書の中で、研究対象たるべき条件に「美的内容文辞」の有無を挙げた。「韻文」は、文学に入れ、「散文」では小説や戯曲、「駢文」「辞賦」をも「文学」だとした。ただし、長澤氏は「左国史漢、孟子、莊子」「唐宋八大家文」「桐城派の古文」などの「古文」や「擬古文」を文学とするには躊躇し、「どこの国

に、物語風ならぬ史書や政治的議論文を literature に入れる所があらう。私は、殊に、擬古文はいれたくない」と述べた。

これを受けて吉川氏はまず「美的内容文辞」の「美」について、長澤氏が「現在のわれわれが美しいと感じること」に限定しがちであつて、「過去のある時代の支那人が美しいと感じたこと」を除外する点を批判する。それでは「われわれの手近な鑑賞に堪えるものを、支那文学の中から選び出すことにはなつても、支那の文学、文化事象としての文学を、歴史的に認識することにはならない」からである。

これは、中国文学研究においては、決して歴史的視野や古典尊重の精神を閑却できぬことを主張されたものである。

次に、長澤氏が欧米の literature の定義に依拠して、散文では小説と戯曲とのみを、文学の王座を占めるものとする立場に固執して「物語り風ならぬ史書や政治的議論文」を文学から除外することを吉川氏は批判する。曰く、「物語り風ならぬ史書」も「政治的議論文」も、その「文辞」が「美的」である限り、風花雪月の文章と一連のものであることを意識しつつ存在しているのであり、逆にまた風花雪月の文章は、「物語り風ならぬ史書」や「政治的議論文」と一連のものなることを意識しつつ存在している」と。中国では史書にも詩歌の引用があり、戯曲では詩詞がセリフに代わるのが常だし、三言二拍等の白話小説においても、詩詞が重要な機能を果たす。文学を史書、政治的議論文と峻別し、韻文と散文とを区分して、散文を上位に置くのは、欧米的文学観に由来するもので、中国文学の十全な把握を妨げる。

ここで想起するのは、吉川氏がその師狩野君山を回想する際によく紹介した「詩文を作るには日本人の詩文を見てゐてはダメだ」という提言である。これは日本漢詩文を並流として一括して退けるものではない。小島祐馬「狩野先生の學風」(『当方學報 京都第十六冊』一九四八・九)には、右の言辞に続けて「日本では文人は經學などいらぬものとして居る。なるほど經學はやらざとも才さへあらば、一寸詩文は出来るが、それでは根柢が無く軽い、しつかりしたものとは出来ない。」という君山の語を引く。君山の提言は、中国の學問は、いずれのジャンルを専攻する場合でも、「經子史集」を貫く「學際的」研究姿勢が要求されることを教える。つまり、政治学(經)、思想哲学(子)、歴史学(史)、文学(集)の、いわゆる人文科学を個別に攻めるに際しては、排他的に狭い専門領域のみを掘り下げるだけで充足してはならないことを君山は言いたかつたのだ。君山の真意は、經学の根柢のある日本の漢詩人までを貶すものではない。吉川氏が、長澤氏の近代主義を批判して遵守しようとした中国学の立場は、一貫して「學際的」であつたのであり、「經」「子」「史」「集」のいずれを専攻する場合でも、他のジャンルの教養を必須とした。われわれの未来を照らし出すのは、ジャンルの細分化させ、党派主義の呪縛に陥る欧米由来の研究姿勢ではなく、ジャンルに固執する党派性を超えて、日本語を構成する和語・漢語の機能をつぶさに味わうことを教える、吉川氏の依拠した「中国学」の態度だと思つてゐる。